



現代人の 自己の病理

木村敏

kimura bin

わたしたち精神科医が診察室で出会うさまざまな病気は、それぞれに人間の生き方というものについて多くのことを教えてくれる。

人間の生き方といっても、わたしたちは自分一人では生きられない。周囲の人たちとの

社会的な生活が人生のすべてなのだから、社会全体のありようが時代とともに変われば、人間の生き方も当然変化してくる。わたしのようにほとんど半世紀にわたって精神科医をやっていると、患者と呼ばれる人たち個人個人の生き方だけでなく、この五十年間、徐々にではあるが着実に進行してきている社会全体の変化も実感せずにはいられない。

たとえば鬱病という病気は昔からあった。ふつうに元氣だった人が、あるときから急に気分が落ち込んだり氣力がなくなったりして仕事ができなくなってしまう、ときには真剣に自殺を考える、といった病氣である。

わたしが医者になった頃、鬱病の多くは内因性の病氣と考えられていた。内因性というのは、身体にも心にも原因がなくて、先天的な体質や氣質を考える以外ないような、いわば原因不明の病氣という意味である。

その頃、ドイツのテレンバッハという学者が『メランコリー』という本を書いた。メランコリーとは鬱病のことである。彼はこの本の中で、いわゆる内因性の鬱病は、義務感や責任感が強くて人生の秩序を大事にする律儀な人物が、思いがけず巻き込まれた秩序の変化（引越、転勤、定年、家族の病氣など）

に適応できず、周囲から自分に向けられた期待に応えられなくなったことに絶望して陥る

病的な変化だ、という学説を提唱した。そして、そういった性格のことを「メランコリー親和型」と名づけた。

メランコリー親和型の人の対人関係面での大きな特徴は、他人に尽くし、相手から喜んでもらうことを生き甲斐にしているということである。彼の弟子のクラウスによれば、こういう人は自分の主体性よりも周囲の人たちのあいだで自分に与えられた役割に、より大きなウエイトを置いて生きている人だという。

テレンバッハのこの学説は、その当時、わたしたちが臨床で目にする内因性鬱病の大半を見事に説明してくれるように思われた。それにこのタイプの鬱病には、ちょうどその頃から臨床に導入されるようになった抗鬱剤という種類の薬がよく効いて、比較的短期間で元氣を回復させることができるため、困難なケースを抱え込んでややもすれば自信を失いがちなわたしたち精神科医にとつて、ありがたい学説として高い評価が与えられていた。

しかし、この学説が発表された当時から、それが積極的に評価されたのは日本とヨーロッパ各国だけだった。いろいろな意味で精神

医学大国であるアメリカでは、この学説はほとんどかえりみられなかった。そしてそれから約四十年後の現在、わたし自身の診察室を訪れる鬱病患者にも、典型的なメランコリー親和型の人はめっきり少なくなっている。そのかわりに増えているのは、それとは対照的な、いわば「他罰的」なタイプの人たちである。この人たちは自分の不調の原因を周囲に転嫁して、自分よりも相手側の義務や責任を強調したがる。だから当然、他人に尽くすよりも他人から大事にしてもらいたがり、自分の果たす役割よりも自分に与えられる評価のほうを大切にす。そしてこの種類の鬱病は、どうしたものか抗鬱剤でも治りにくい。

もう一つの例は、鬱病と並んで内因性の病氣の双壁と考えられている統合失調症（これ

までの病名では精神分裂病である。

この病気にかかると、だれもいないのに自分の悪口を言う声が聞こえる、自分の行動が逐一監視されている、自分の一挙手一投足がリモコンで操られている、心の中で考えたことが即座に周囲に伝わってしまう、などといった幻覚や妄想の症状が現れやすく、周囲の人には理解しにくい唐突な行動に走ったり、他人との意思疎通が困難になったりして、結局は社会生活から離脱して自分一人の世界に閉じこもってしまう。

この病気の最大の特徴は、自己形成の障害だということがわかっている。しかし一口に自己形成といっても、それはきわめて複雑な過程である。生まれたばかりの赤ん坊にはまだ自己はない。自己というものは、まずは母親との、それから父親やきょうだい、そして次第にそれ以外の人たちとの関係を自分の中に取り込むことによって、自然に成長してくる。自分がこの関係の中に吸収されてしまったのでは自己というものはありえない。他人との関係を足場にしながら、その上に自分独自の世界を作り上げることによって、はじめに自己というものが形成できる。自己とはいわば、周囲の他人たちとの関係の中にある自分と、そこに吸収されてしまわない独自の世界との、緊張をはらんだ二重の構造をもったものでなくてはならない。

そういった自己は、三歳頃までにその一番幼い原型のようなものが形成され、それから幼稚園や学校での複雑な友人関係を通じて鍛えられて、身体的に第二次性徴を迎える頃になると、独立の人格として一応の完成を迎える。人間の社会では結婚して子供を産むのもっと後のことになるけれども、生物学的には生殖可能な成熟に達したこの頃に、心理面でも自己の独立が達成されるということである。一般に思春期と呼ばれるこの年齢になると、家族との関係を離れて異性と関係を結び、そこでようやく関係の中の自己と独立の自己との二重構造が完成される。

統合失調症の人を見てみると、この二重構造がいかに弱い。この人たちは、幼いときから自己主張をあまりしない。親から見ても育てやすい子だったということがよく言われる。嘘のつけない子だったと言われることも多い。嘘がつけるといことは、他人に知られない自分だけの世界をもてるということである。この人たちは生まれつき、自己がすっかり関係の中に吸収されていて、独自の世界を形成できていないように思われる。だから、独立の人格として行動せねばならない思春期に入ると、たちまち大きな問題に直面することになる。まず大変なのは異性との関係であり、それと連動して親との関係である。家族から独立して成熟した異性関係に入るとい、だ

れもが通らなくてはならない人生の曲がり角で挫折して、そこから統合失調症の症状が出現してくる。

この統合失調症という病気は、鬱病のように昔からあったとは言いにくい。すぐれた医学をもっていた古代ギリシアの文献を調べても、鬱病の記載はすぐ見つかるのに、現在の統合失調症に相当するような病像は描写されていない。シェイクスピアの作品には変わった人や明らかに精神に異常のある人物がたくさん出てくるが、統合失調症と診断できる人は一人もいない。どうやらこの病気は、一八〇〇年前後になつてはじめて人類の歴史に登場してきたものらしい。これがいわゆる「統合失調症近年説」である。

十九世紀には、この「青年をおかす奇妙な狂気」が非常に勢いで増え始めた。やがてそれは「早発性痴呆」という病名でまとめられ、一九一一年にスイスのブロイラーという学者によって「スキゾフレニア」(精神分裂病)と命名された。どうやらこの頃が、この病気の最盛期だったのではないかと思われる。

二十世紀の半ば頃から、統合失調症の勢いは目立って衰えてきた。わたしが精神科医になつたのは一九五六年だが、当時はまだブロイラーの教科書に書いてあるとおりの典型的な病像を示す統合失調症がいくらでも見られた。しかし、その後まもなく「分裂病の軽症

化」ということが語られ始めた。それはけっしてそのころ開発が始まった精神病治療薬の恩恵ではない。薬をのむ前の患者の病像も以前より軽症化しているからである。

病像が軽症化しているだけではない。精神科をはじめ訪れる患者の中で、疑いなく統合失調症と診断できる人の数が間違いなく減ってきている。なかなか完治しにくい慢性の病気だから、すでに発病してしまっている人を含めた患者数が減少するのはもっと先のことだろうけれども、全体として右肩下がりの傾向にあることは間違いないと言つてよい。

これはいったいどうしてなのか、その解釈はいろいろ考えられる。統合失調症を完全に脳の病気と見ている学者の中には、この病気の原因は未知のウイルスであつて、十八世紀末頃に人への感染が始まり、最近はその感染力あるいは病原性が衰えてきたのだと考えている人もある。しかし、わたしの考えはそれとは違う。

先にも書いたように、統合失調症は自己形成の病である。もつと言つと、集団的な関係の中での自己と、独立した単独の自己との二重構造がうまく形成できない病である。

自己を形成し自己を意識するのは、おそらく他の動物には見られない人類特有の現象だろう。動物の個体はあくまで集団の一員でしかない。しかし、人類が動物から進化してた

どつてきた歴史の中で、自己の単独性と主体性についての意識が集団への所属の意識と肩を並べるまでに強くなつたのは、比較的近年のことと考えてよい。

古代文明以来、明確な自己意識を備えた、傑出した個々の人物は、もちろんいつの時代にも登場していただろう。しかし社会全体として、個と集団の折り合いが重大な問題となつてきたのは、たかだかここ二、三百年のことではなかつただろうか。ヨーロッパでいうと、十八世紀の啓蒙思想やブルジョア革命がその象徴となるだろう。ヨーロッパの歴史に統合失調症が登場したのがこの時代を過ぎてからだとする、これは非常に示唆に富むことであるように思われる。十九世紀後半から二十世紀前半にかけての統合失調症の最盛期というのは、実はこの個人と集団の緊張関係が歴史上もつとも尖鋭化した時期ではなかつたか。一方で個人の人權や自由の意識が急速に高まり、他方ではナシヨナリズムや全体主義によつて集団が個人を圧殺しようとしていた時期である。

第二次大戦後の先進諸国では、個と集団の緊張関係は十八世紀以前とは逆のパターンに、つまり個の尊厳の強調と集団の弱体化という方向に転回してきた。個と集団のバランスの上に成り立っている近代的自己のありかたが、根本から変化してきたということである。自

己形成の病としての統合失調症がその影響を受けないはずはない。従来のかたちでの統合失調症が、だんだん過去の遺物になってゆくのは当然のことではないか。

鬱病についてみられる現象、つまり社会的な役割を大切にして自己の義務と責任をつねに意識し、ひたすら他人に尽くそうとするメランコリー親和型の鬱病が減少し、周囲に向かって自分の権利を主張する鬱病が増加しているというのも、集団と個の勢力関係の逆転という同じ傾向の現れであるように思われる。あるいは言い方をかえれば、現代の人間は、相手抜きで、ただ自分一人だけで自己であるうとしていてのではないか。ひよつとするとこれは、進化の最終局面で自己意識という余計なものを背負わされた人類にとつて、必然的な運命なのかもしれない。

これを必然的な運命として受け入れなくてはならないのかどうかは、一精神科医の立場からはなんとも言えない。ただ、人間の意識が時代とともに大きく変化してきているということだけは、精神医学の現場でもはっきりと見て取れるようである。

（きむら） びん・京都大学名誉教授、河合文化教育研究所主任研究員
著書に「木村敏著作集」全八巻 弘文堂